

蝶の博物詩

生態19

擬態5



キアゲハ
(2003年8月1日 野尻湖)

photo by

Nishiyama



ヒメギフチョウ
(2009年5月4日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態19

擬態5

昔ドイツに住んでいたとき、青いフォルクスワーゲン(VW)、かぶと虫に乗っていたが、数カ月の間に2回追突された。加害者と話がついたあと修理工場にもっていくと、青や緑の車が、赤、黄、シルバーなどに比べて事故に遭う確率が高いのは常識だと修理工に嗤われた。青、緑は後退色といい、車は実際より遠くにあるようにみえるという。これに対し進出色の赤い車は、夜間とはもかくとして昼は目立つ。消防車は赤い。今の白バイも私の子どものころは“赤バイ”であった。色の組み合わせで危険を感知させるのは黄と黒の縞模様であろう。かつて地下鉄の工事現場や病院の地下の放射線室でみられた。

昆虫の世界ですぐに思い出すのは獐猛なスズメバチである。鋭い針に変化した産卵管と毒腺をもち、ヒトはもとより、他の昆虫や鳥からも恐れられている。スズメバチを捕食しようとして逆に刺された鳥や蝶は二度とハチを食べない。黒と黄のまだら模様は鳥にとって警戒色であり、ハチにとっては自らの危険性を誇示する威嚇色、顕示色といえよう。

夏、働きバチは樹液の出る樹にやってくる。種々のムシの集まる昆虫酒場では先客のタテハチョウ類は争う術をもたず、数回はばたいては席を譲る。かくしてスズメバチが大きな顔をして樹液のもっともよく出る場所を占める。

ところで黒と黄のまだら模様をし、飛び方や羽音までスズメバチに擬態した、いわゆる“偽バチ”が昆虫の世界にたくさんいる。蝶と同じ鱗翅目の蛾のうちで翅が透明で細長いスカシバ蛾が有名である。クビアカスカシバが夏の昼間に訪花しつつ飛び廻る姿は、昆虫に詳しい人でもほとんど区別できないという。またセスジスカシバという蛾もキイロスズメバチに酷似している。これらの例は針をもたないスカシバが自分をハチと似せることで捕食者から逃れるという戦術であり、ペーヅ型擬態という。いわば虎の威を借る狐に類する。

カミキリムシの仲間にはトラフカミキリという甲虫がいる。体は黒く、頭と前胸部が黄、上翅に黄色の線があり、野外で出会うとギョッとなるほどスズメバチに似ている。これはクワの害虫である。

スカシバの類は別として、蝶のような鱗翅目の昆虫がハチに擬態するのはいささか無理である。黄と黒の縞模様がある蝶といえばキアゲハ、ナミアゲハ、ギフチョウ、ヒメギフチョウがその典型であろう。これらの蝶は小さいながらも尾状の突起があり、そのそばにあまり目立たないが赤ないし橙色の目玉模様がある。この特徴は警戒的というよりは、そらし型擬態とみなしたほうがよいであろう。

まったく余談であるが、私の後退色のVWにぶつかった1台はアメリカGIの車で、その保険会社は修理後まもなく倒産したと聞く。他の1台はVeneziaの手前のMestreの貴族の子弟の高級車で、Veneziaにはどっちみち車で入れないので近くの工場に修理してもらった。帰路、修理代を貰いに彼の豪邸に寄ったがヨーロッパではどちらが戦勝国かわからなくなった。

西山茂夫